

取れる地形であるし、航空写真などでみると一層明瞭になる。これが会津本郷町東の岩崎山付近から分れた大川の分流であるが、応永二十六年の大洪水では、大川の本流がこの鶴沼川に注ぎこんで、川南、館の内付近に大災害があったと記録している。この頃まで大川の本流は現在のように固定しておらず、旧鶴沼川跡に時折流れ込むような洪水を起していたと思われる。

大川の名称は何時頃よりできたか、よくわからない。大きな川ができたから、これを通称して、何時か本名になったのかも知れない。寛文十二年（一六七二）の会津旧事雑考には、応永二十六年鶴沼川の決潰した図に大川蟹川、佐野川の名称を入れている。既に佐布川に向う鶴沼川跡は鶴沼川堰などともいわれ、既にほぼ現在の大川の流路はできていたと思われる。それが洪水のために鶴沼川堰に決潰したのであるから、まだ河筋は固定したとはいい得ない。七年経た応永三十三年（一四二六）にも、さらに後述する約一〇〇年後の天文五年（一五三六）にも、大洪水があって、この鶴沼川堰に放流している。その洪水以後が、現在の大川は名実共に、固定したということになる。

鶴沼川の名称は、現在も大川の上流に、明らかに残っている。湯野上のちよつと下流、小野の付近で、二岐山北麓の岩瀬郡湯本方面から流れてくる河川名で、現在この上流に羽鳥ダムができて、この上流の水を阿武隈川流域の開拓、灌漑用水になっていること、時に大川流域に濁水を来す因として、会津盆地の農民の関心を集めている。

このことは寛文四年（一六六四）に書上げて、寛文六年（一六六六）山崎闇齋により脱稿された、俗に古風土記と呼ばれる、会津風土記にも、漢文調であるが、次のように記されている。

鶴沼川 俗呼曰大川、源二、一出岩瀬郡鶴沼、西流、経会津郡鈴嵩麓至白岩村、一出会津郡山王峠、北流、経